

研究報告

認知症高齢者との交流場面における看護学生の心理的特徴

—プロセスレコードによる内容分析—

中野雅子¹ 徳永基与子² 西尾ゆかり³

¹京都市立看護短期大学 ²聖隷クリストファー大学 ³滋賀医科大学

要旨

本研究は、看護学生が認知症高齢者との関係性を構築する実習初期の交流場面の心理的特徴と、その変化のプロセスを明らかにすることを目的とした。特別養護老人ホームにおいて3日間の臨地実習を行った看護学生37名（男子2名女子35名）の印象的だった交流場面のプロセスレコードを、質的に分析しその内容を検討した。分析結果から【訴えを無視せずよく聞く】【納得してもらえらることを大切にす】【必要なことを積極的に声かす】【自尊心が保てるようにかかわる】【その人の趣味・疾患の特徴をよく知っておく】の5つのカテゴリーを抽出することができた。したがって看護学生の心理には、認知症高齢者の意思や納得をよく確認すること、自尊心や特性を尊重する特徴がみられ、困難感や不安感が自らの判断や対応の形成へと変化するプロセスがあった。

キーワード：認知症高齢者 看護学生 プロセスレコード

はじめに

認知症高齢者には記憶障害および認知機能障害に起因する『会話が成立しない』、あるいは『会話は流暢であるが意味内容がかみ合わない』等のコミュニケーション障害があり、しばしばケア場を困難にする状況がある¹⁾。ケア提供者と認知症高齢者間の相互作用についての近年の研究動向は、介護職員の認知症の行動・心理状態の捉え方には、トラブルの軽減を図る『問題解決的捉え方』と、Aさんの居場所がないのはなぜかなど『探索的な捉え方』に二分されることや、認知症高齢者を肯定的に表現するスタッフ間コミュニケーションを実践した効果として、高齢者の気分や応答がよくなり BPSD

(behavioral and psychological symptom of dementia) が減少した²⁾等が報告されている。長谷川ら^{3~4)}は、認知症高齢者の心の向きを知り、それに沿って援助するのが認知症ケアだとするパーソン・センタード・ケア person-centered care が重要だと述べている。

一方看護学生は、事前に認知症高齢者との交流経験が殆んどなく臨地実習に臨むため、実習前は漠然とした不安に基づく否定的イメージがある⁵⁾。しか

し実習後に『その人らしさの保持』、『記憶障害への悲嘆』という具体的イメージに変化し肯定化すると言われている⁶⁾。また『尊厳性』や『親密性』に関する肯定感は学年が上がるにつれ高まり、否定的イメージが次第に緩和されるとも報告された⁷⁾。

本稿では、知識・ケア技法ともに未熟な段階にある看護学生が実習初期に認知症高齢者と交流する場面に着目した。つまり実習終了後学生自身が「特に気になり心に残った交流場面」を一場面選択して振り返り、その経過を再構成し、記述・分析することで学びを深めるが、その記述内容について、認知症高齢者との関係性を構築する初期交流における看護学生の心理的特徴と変化のプロセスを検討した。

研究目的

実習初期の段階において、認知症高齢者との関係性を構築する交流場面での看護学生にはどのような心理的特徴があり、変化のプロセスを経るのかを明らかにする。

研究方法

1. 研究期間と対象

研究期間：平成 20 年 5 月～12 月

研究対象：K 市内の特別養護老人ホームで 3 日間の臨地実習を行った K 短期大学 3 回生 47 名（男子学生 2 名、女子学生 45 名）の看護学生の実習記録

2. 研究方法

質的記述的研究

3. データ収集・分析方法

「特に気になり心に残った場面」の再構成の記述方法は、「あの交流が気にかかっている」、「思ったよりコミュニケーションがうまくとれた（あるいはとれなかった）のはなぜか」、「突然思いがけない発言があったが、どう対応するべきだったか」、「相手の病的体験（例；認知障害）にどう対応したらよかったか」等の「特に気になった場面」を自由に一つ選び、①選んだ場面の説明及び理由②認知症高齢者の方の言動③私が感じたことや考えたこと④私の言動⑤私の分析・考察をプロセスレコード形式で記述したものと、⑥実習後の感想を資料とした。

記述データは、研究者が精読を繰り返し、最小単位の逐語録から意味ある内容をコード化した。さらにコードを類似性に基づきグループ化しサブカテゴリーとし、サブカテゴリーの意味的象徴的言語をシンボリックに抽出し統合することで最終的にコードを抽出した。分析結果の信頼性を確保するため、共同研究者 3 名で分析し、老年看護学教授のスーパーバイズを受けた。

4. 倫理的配慮

事前に京都市立看護短期大学倫理委員会の承認を得た。研究協力者全員に書面で研究の主旨を十分に説明し、協力辞退や中断があっても評価への影響がないことを保障し、自由参加を募った。データの匿名化とカテゴリー化、守秘義務遂行を保障し、同意を得て行った。

結果

1. 研究対象

研究に協力した看護学生 47 名の記録のうち、①～⑥すべての項目に十分な記載があった 37 名分の実習記録とした。

2. 交流場面の特徴に関する分析

37 名が実習後再構成し記述した場面は【訴えを無視せずよく聞く】【納得してもらえることを大切にす】【必要なことを積極的に声かけする】【自尊心が保てるようにかかわる】【その人の趣味・疾患の特徴をよく知っておく】の 5 つのカテゴリーに統合することができた。以下<>はサブカテゴリーとする。

1) 【訴えを無視せずよく聞く】

最も多い 12 名 (32.4%) の記述がこのカテゴリーに含まれ、9 つのサブカテゴリーで構成された。この中には、高齢者の言葉が聞き取りにくく<何度も聞き返してしまった>、あるいは高齢者の話題が急なテンポで変わることによって学生がくなくかついけなかった>や、高齢者から「私の頭あほやし」といった言葉が飛び出したことに学生が驚き、焦り、くうまく返答ができなかったが、傾聴に徹した>が含まれる。これらは学生が戸惑いの中手探りで行った傾聴の実践であったことが窺える。

また、同じ内容の会話が繰り返されることに学生は<一時戸惑うが、思いなおした>場面や、<調査的に質問をせず、傾聴しようと試みた>、「私をたたく人がまた明日来ると言いました」と訴えられ、大丈夫であることを説明しくあくまで辛抱強く関わった>記述がある。つまり学生が自らのコミュニケーションスキルを駆使して関わろうとしている。

また帰宅願望を訴えられる高齢者と園庭を巡ろうとし、ご本人から「もう（施設へ）帰ります」と言われ<意外な体験の>と記述した内容があった。また、当初認知症高齢者に対する緊張があったため、<話すことさえできなかった>が、次第に会話が楽しくなり<傾聴、傾きから更に積極的になるまで、そう時間を要しなかった>と振り返る記述もあった。これらは、学生がとりあえず積極的に一步を踏み出した結果、その先に道が開け、学びにつながった体験の記述と言える。

2) 【納得してもらえることを大切にす】

9 名 (24.3%) の記述がこのカテゴリーに含まれ、5 つのサブカテゴリーで構成された。この中では、事実でない発言を即座に否定し、<すぐ気が付き言

い直した>や、「外で家族が待っているから出たい」と頼まれ、<危険がないように否定せず見守った>や、お守りが一つ足りないとの訴えに、「もともと二つでしたよ」と<辛抱強く説明した>とあった。いずれも、方法論的な確信はないが、ごまかしではない説明が必要との学生の判断がある。

また徘徊や帰宅願望に対し、介護士のアドバイスによる「食事をしてから行きましょう」という言葉や、手を握るタッチングを学び<安心感への工夫を試みた>記述があった。また、何度も「ぶりを冷蔵庫から出してきて」と頼まれ、「待っててください」と気を紛らす対応を繰り返し、別の高齢者の方から「わがまま言わんときなさい」と言ってくもらい、<入所者に助けられた思い>と記述している。

3) 【必要なことを積極的に声かけする】

6名(16.2%)の記述がこのカテゴリーに含まれ、7つのサブカテゴリーで構成された。この中には、施設への支払いを気にされる方に「今日のお泊りはここですよ。お金の心配ありません」と声をかけ、<安心される言葉がわかった>や、「ここから出て行って」と言われすぐ出てしまったが、「お話しませんか」と<話題を変えて言うべきと反省した>が含まれている。

更に、帰宅願望から学生への‘引っ掻く’あるいは‘たたく’行為があったが、その場から逃げず「今日はここにお泊りですよ」と静かに伝え続け、引き続き食事介助をするうちに‘引っ掻く’、‘たたく’行為が次第におさまったことを体験し<逃げなかったことで信頼し安心してもらえた実感>としていた。

また入浴を嫌がられ、転倒の危険が高まった場面で、やはり認知症の方にも一つ一つの動作に声かけをし、不安の除去に努めることが必要だったと学生が感じていた場面があった。これらは、ケアの基本である<‘声かけ’が不安の除去として例外なく必要であることを学んだ>例であった。

一方学生の方から帰宅願望の高齢者へ積極的に気分が変わるような言葉かけをしてみたが、聞いてもらえず、最後に「私と一緒にいてくださいお願いします」と<率直に言ったことで承諾していただけた

>経験もあった。また、「寝たいけど、どうしたらいいかわからん」と悩まれるため「ここで寝ていいですよ」「お金の心配はいりません」と<説明的に言うと、安心して納得してもらえた>とあった。

また「おしぼり作りをお願いします」と言ったところ「私にばかり頼まないで」と拒否され、役割が生きがいとなるときのあれば、負担となるときのあり、<意思を確認する必要性を感じる>とあった。

4) 【自尊心が保てるようにかかわる】

6名(16.2%)の記述がこのカテゴリーに含まれた。ある学生は排泄介助中「離して」と叫ばれ、<羞恥心からの拒否との気づき>があった。また架空の話で京都見物を勧められ、架空で名所を説明してもらい高齢者に満足され、<人に役立つことに精神的な満足があると気づかされた>、聞き取りにくい言葉で話される方に対し、<聞き返してばかりは失礼だと悩む>記述が見られる。

また「あとは死ぬのを待つだけ」との発言に出合い、「趣味のことで人に教えてあげたりしましょう」と学生は励ましく自分の言葉は無理に話をそらしたただけだったと感じる>場面もあった。

5) 【その人の趣味や特徴をよく知っておく】

4名(10.8%)の記述がこのカテゴリーに含まれ、4つのサブカテゴリーで構成された。

ある学生は、パン食である高齢者が牛乳とお茶両方にパンを浸す行為に、<‘こだわり行為’が存在する>と認めている。

また高齢者が運動しく身体を動かすことで生きがいにつながる>と学生が感じる場面の記述があった。さらに、入浴介助の脱衣時に「服を脱いでください」との声かけだけでは行動に移せなかった高齢者が、最初に少し手をかけると、その後はスムーズに自立して行えるとわかり、<認知症のコミュニケーション障害の奥深さを再認識した>場面もあった。

また、爪のおしゃれをしている方に、爪を話題に話しかけ笑顔に出会い、<認知症の方におしゃれは関係ないとの考えには何の根拠もない>と学生が気づいた場面があった。

考察

看護学生と認知症高齢者間には、世代間の隔たりや認知症によるコミュニケーション障害の問題があり、学ぶべきことは少なくない⁸⁻⁹⁾。

今回多くの学生が、認知症高齢者との関係性を構築する初期の段階で、わからないことに戸惑い高齢者の言葉や行動に驚きつつ【訴えを無視せずよく聞く】関わり、すなわち相手をよく知ることが重要だと心理が先行していた。そして「自分の行動やコミュニケーションの取り方はこれでよかったのだろうか」と自問している。一方対象が認知症高齢者であっても、様々な場面で、わかってもらえるための働きかけが大切だと意識が出てきており、【納得してもらえることを大切にすることや必要なことはむしろ積極的に声かけすることが重要だったと気付いていくプロセスが続いていた。このことは、認知症のみを意識したかわりから一歩前進して思考しているといえる。また【必要なことを積極的に声かけする】など、相互理解を求める意識が芽生えており、これまで体験しなかった高齢者の‘たたく’などの行為にも辛抱強く対処し、行為が収まることを待っている。また【自尊心が保てるようにかかわる】や【その人の趣味・疾患の特徴をよく知っておく】とのカテゴリーには、自尊心を支え個人特性を知ろうとする心理がみられているが、自分の相手への言葉は無理に話をそらしたただだったと感じたり、認知症のコミュニケーション障害が関わり方による変化があり、奥深さを再認識している。しかし困難感や不安感が学生自身の判断や対応の形成へと変化するプロセスがみられる。

さらに、高齢者の自尊心が保てるようにかかわる必要性への気づきやその人の趣味・疾患の特徴を知っておく必要性があったとの結論付けは、認知症ケアにおける『尊厳を支える』、つまり認知症があったとしても、本人が望む生活を安全に安心して継続してもらえるように努力目標をあげる心理が芽生えてきたことが推測できた。

今回は、看護学生が高齢者との関係性を築くについて不慣れな初期段階での検討であった。今後はさ

らに対象者数を増やし、言語・非言語的な交流手段別に分析し、看護学生の認知症高齢者との交流の特徴を明らかにし課題についての検討が必要であると考える。

謝辞

本研究に協力してくれた学生と実習施設の皆様に深く感謝申し上げます。また、老年看護学の見地からスーパーバイズして頂いた滋賀医科大学医学部看護学科老年看護学の太田節子教授に感謝致します。

文献

- 1) 長畑多代,松田千登勢:介護老人施設で働く看護師の痴呆症状に対するとらえ方と対応.老年看護学,8(1),2003
- 2) 湯浅美千代,野口美和子:認知症を有する高齢者を肯定的に表現する職員間コミュニケーションの効果.日本老年看護学,10(2),2006
- 3) 長谷川和夫:認知症ケアの理念.(認知症ケア学会編)認知症ケア標準テキスト,認知症ケアの基礎,21-28,ワールドプランニング,東京,2005
- 4) 水野裕:Quality of Care をどう考えるか,Dementia Care Mapping(DCM)をめぐって,老年精神医学雑誌,15,1384-1391,2004
- 5) 木村清美,尾島喜代美:老年看護学実習前後における看護学生のイメージの変化 高齢者、認知症高齢者、高齢者看護のイメージ.高崎健康福祉大学紀要,8,25-35.2009
- 6) 田中敦子,鳴海喜代子:認知症高齢者への受容的感情とその影響要因に関する縦断的調査.埼玉県立大学紀要,7,59-66,2006
- 7) 上野まり,廣川聖:認知症高齢者のグループホームでの一日実習における看護学生の学び(第1報)学生の実習記録から.神奈川県立保健福祉大学誌,6(1),3-11,2009
- 8) 佐藤敏子:老年看護教育において世代間交流を学ぶ意義.老年看護学,10(2),2006
- 9) 清水裕子:看護学生の老年者との対話の問題と特徴.老年看護学,11(2),2007